

# 横浜市出土の縄文時代中期土器の顔面装飾

— 泉日向遺跡・阿久和宮腰遺跡・青ヶ台貝塚・C17 遺跡例 —

中村 耕作・平山 尚言

## 1. はじめに

縄文時代は、日常生活に儀礼・呪術が深く浸透していた時代であり、土器の文様もその1つと考えられる。その意味は現代の我々には理解できないとしても、そのあり方によって文化・社会の状況の違いを見出すことは可能である。このうち特徴的な造形で眼を引く顔身体装飾は、中期前半期、後期後半期～晩期など、特定の集中する時期がある。特に前者は「顔面把手」として知られる定型的な装飾が甲信～西関東を中心に300例近くが知られている。その変遷過程からは、土器の器種分化や深鉢の中での各種タイプの分化などの複雑化と連動して、顔面や動物装飾が複雑化しており（中村 2024）、社会動向を伺う資料となる。また、その過程では、全身像から顔面あるいは手腕などの部分像に変化していくことや、釣り眼と丸眼という異なる顔面表現をもつ2系統が肩から尻までの表現を共有し、文様化して長く残ることも知られており、身体認識を考える上でも重要である（中村 2022）。

横浜市内でも複数の出土例が知られており、研究の俎上に上ってきた。大熊仲町例は、土器器体の大部分が遺存する編年上の基準資料として、また目鼻口を表現していないものとして重要である（中山 2015、吉本・渡辺 2004）。また、公田町例は、近年図面が報告されると共に、顔面把手なのか土偶なのか釣手土器の頂部装飾なのかという問題を提起している（千葉 2012）。顔面把手付土器を概観した中山真治（2015）は、横浜地域について、中部高地からの情報の集積地・最終的な到達地として位置づけている。

しかしながら、重要資料でありながら、未報告・未図化の資料も存在する。特に青ヶ台例は、釣り眼－割り貫きと丸眼－線刻の2種の眼をあわせもつものとして重視されてきた（江坂 1970、小林 1984）。本稿では、同例を含む横浜市埋蔵文化財センターが所蔵する資料のうち、未図化の資料4遺跡6点および土偶1点・釣手土器1点を図化し、その位置づけをはかるものである。

なお、本稿では藤内式期～井戸尻式期の特徴的な頭部像を「顔面把手」、それ以前の事例を含む全身像を伴うものを「土偶装飾付深鉢」と呼ぶ。それ以外の非定型的な事例については、単に顔面装飾と呼んでおく。（中村）

## 2. 泉日向遺跡

### （1）遺跡の概要

泉日向遺跡（荏田第60遺跡・リ60遺跡）は横浜市緑区荏田町3708他（現都筑区荏田南三丁目36付近）に所在し、多摩丘陵東端部に位置する。本遺跡は、早渕川の中流域右岸より南方へと延びる支谷、柚ノ木谷・ごかん谷の最奥部にある台地上に立地する。

泉日向遺跡は、1976年4月19日から6月11日にかけて港北ニュータウン埋蔵文化財調査団による約8,000㎡の範囲で調査が行われ、縄文時代早期の落し穴9基、縄文時代中期の竪穴住居址5軒（小竪穴1基を含む）、土器棄場2ヵ所、焼土4基に加えて近世の道路状遺構1条が検出されている。尚、本遺跡が所在する台地西半は港北ニュータウン事業用地外となり、調査対象外である（横浜市埋蔵文化財センター1990）。

本遺跡の構成としては、台地平坦面の東縁を沿うように住居址と土器棄場が展開している。検出された竪穴住居址及び土器棄場はいずれも縄文時代中期中葉勝坂式期（新道期）を主体としており、一部中期前葉五領ヶ台式期の資料を含んでいるものの、縄文時代中期前半段階にまとまる比較的単純な集落跡として推察される（横浜市埋蔵文化財センター1990）。尚、掲載する顔面把手のうち、遺物包含層出土資料に関しては2・5号住居址西隣のグリッドから見つかったものである。

本稿では、遺物包含層（19・20－37・38グリッド）と南側の土器棄場（15－30グリッド・P No.226）から出土した顔面把手2点について報告する。これらの資料については調査概報等（港北ニュータウン埋蔵文化財調査団1977、横浜市埋蔵文化財センター1990）にて一部紹介されており、今回改めて図化して報告する。（平山）

### （2）土偶装飾付深鉢：土器棄場（15－30グリッド・P No.226）（第1図1）

吉本洋子・渡辺誠（1994）の集成表において1点が「港北のむかし」67号を出典として掲載されていた。当センター所蔵の同号を見ると、旧称の荏田第60遺跡として、表紙に顔面部分の図が掲載されているが、調査団の連絡紙であり、一般に知られるものではなかった。

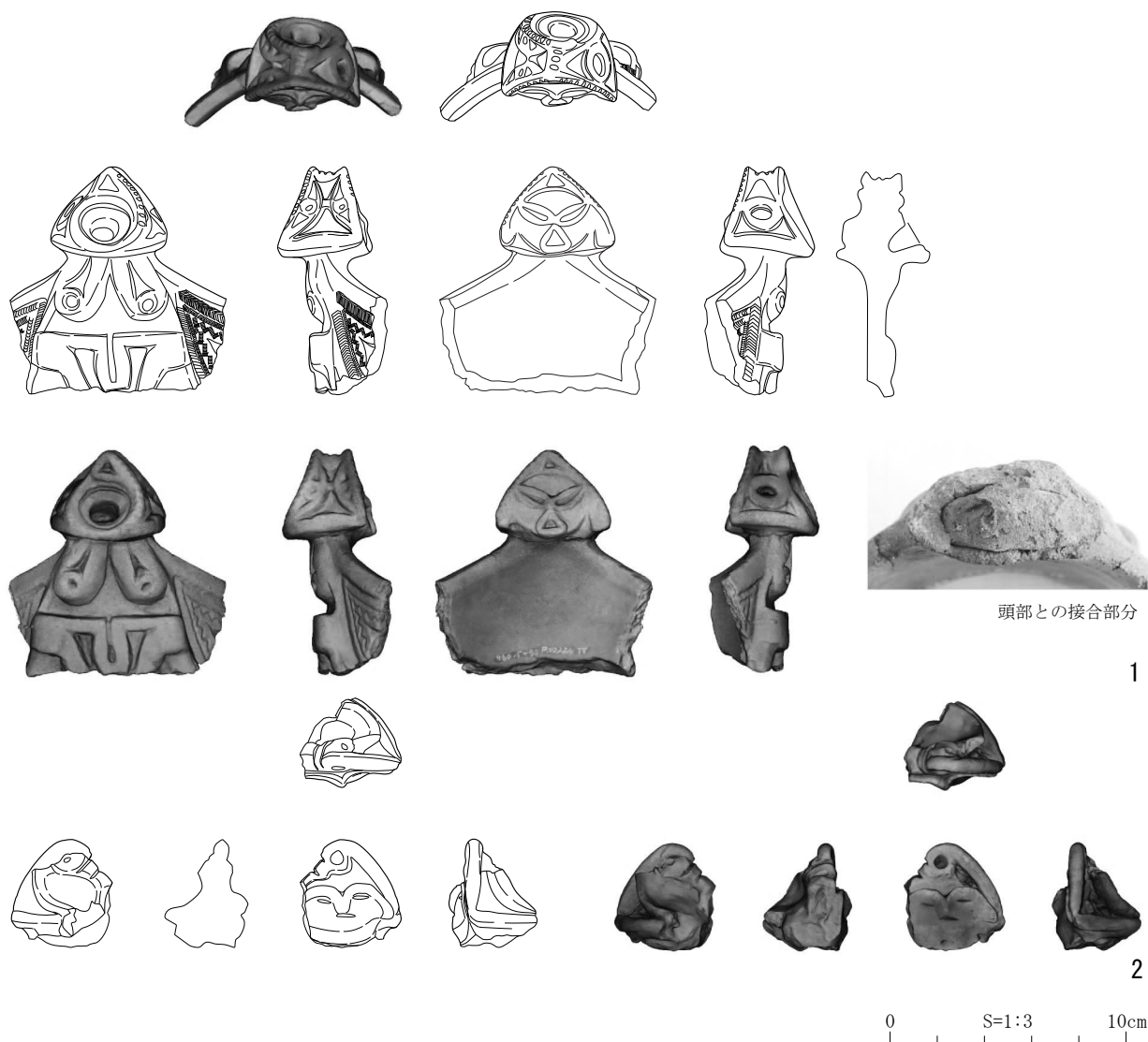
顔面は、三角形を呈しており、稜線上に細かい刻みが入り、額の上には三叉文が配置される。額の部分は低く削られており、隆帯で釣り眼・口を表現する。下部は顎と耳？の間に挟りが入っている。両側面は、隆帯と陰刻で玉抱き三叉文や円文・三叉文を表現する。後頭部も上部の三叉文と下部の円文で玉抱き三叉文を形成する。いわゆる「うなじ文／肩パッド文」は隆帯で、ここにも玉抱き三叉文が付される。一段低い無文部を挟んで、隆帯による背の表現がくる。腕は確認できない。器体と頭部の接合部分は、ソケット状になっている。

器体はあまり遺存していないが、おおよそ直径12cm前後の小形の深鉢で、三角形が強調されない大小2条の三角押文による区画があり、その内部にも、小さな三角押文によるジグザグ文様が入る。新道式後半に位置づけられよう。新道式期の土偶装飾付深鉢のうち、釣り眼系の顔面をもつ事例としては、後頭部の装飾や明確な腕をもたない点などは世田谷区堂ヶ谷戸例に近く、肩パッド文の玉抱き三叉文は、頭部の遺存しない国立市南養寺例と共通する。但し、頭頂部の三叉文は他に例のない特徴である。

### （3）土偶：遺物包含層（19・20－37・38グリッド）（第1図2）

「港北のむかし」には、前掲の1例のほか、「人間の顔をしたお面のようなものが3個発見されている」とあり、該当する可能性がある資料を閲覧したが、このうち、顔面把手の可能性もあると考え本例を図化した。

頂部に円文をもち、顔面を主体に見た場合の左側の輪郭は無文であるのに対し、右側は欠損しているものの、交互刺突状になっている。隆帯による眉・鼻、沈線による眼・口で顔が表現される。後頭部は遺存状況が悪いが、上端には円形刺突を伴う円文が置かれ、その下のやや大きな粘土板による円文によって、左右に三叉状の空間を形成していたと考えられる。土器突起としての積極的な特徴は認められないことから、土偶の可能性が高いと思われる。（中村）



第 1 図 泉日向遺跡出土資料

### 3. 阿久和宮腰遺跡

#### (1) 遺跡の概要

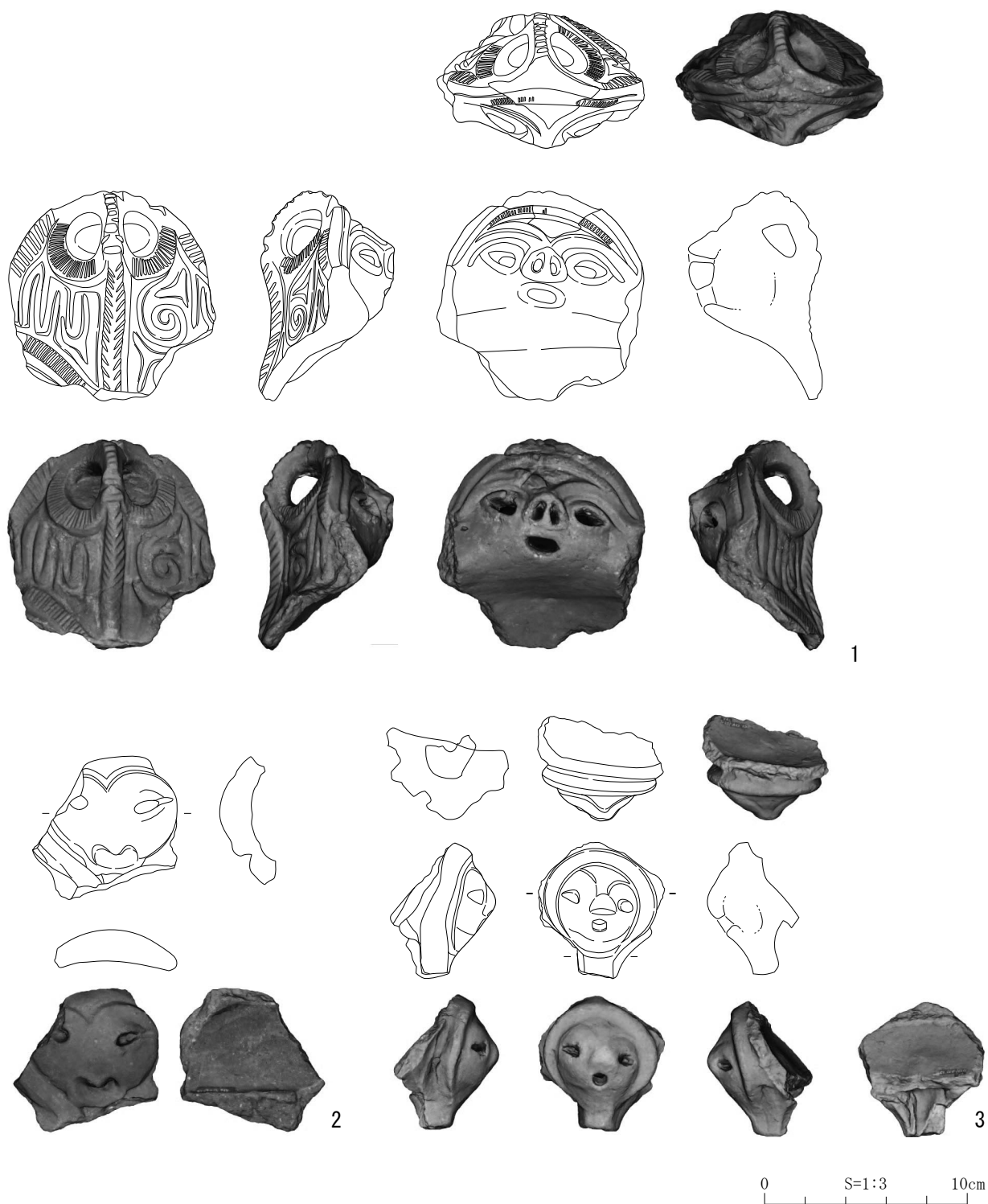
本遺跡は横浜市瀬谷区阿久和町 4,293 他に所在し、相模野台地南東端部に位置する。遺跡は柏尾川の支流である阿久和川の右岸に張り出した段丘上に立地し、東方には阿久和川が南流する。

1993 年 6 月 1・2 日に横浜市教育委員会、1993 年 12 月 1 日から 1994 年 2 月 28 日にかけて株式会社玉川文化財研究所により試掘調査が行われた。その結果を受けて、阿久和宮腰遺跡発掘調査団（団長戸田哲也）による第一次調査（約 5,000㎡）が 1994 年 6 月 1 日から 1995 年 3 月 31 日、第二次調査（約 3,000㎡）が 1995 年 6 月 14 日から 1996 年 1 月 31 日にかけて実施された（阿久和宮腰遺跡発掘調査団 2003）。調査の結果、縄文時代早期の炉穴 10 群や、縄文時代中期の竪穴住居址 267 軒・土坑 412 基・埋設土器 8 基・集石址 13 基が検出されている。特に、縄文時代中期の住居址は直径 100m 以上の範囲で概ね環状に巡り、住居址群の内側には墓域と推定される土坑群が形成される集落構造である。

本稿では、170・209・224 号住居址から出土した顔面把手及び 101 号住居址から出土した釣手土器について再報告する。これらの資料については調査報告書（阿久和宮腰遺跡発掘調査団 2003）があり、写真のみ掲載されている。今回改めて図化して報告する。（平山）

(2) 顔面装飾 1：209 号住居址（第 2 図 1）

後頭部はなだらかに器体の屈曲に連続しており、左右が欠損していることもあって、土器器体からの独立



第 2 図 阿久和宮腰遺跡出土資料 (1)



性が低い特徴的な形状である。正面観は半月形で、額の周りに沈線を巡らし、眉・鼻は隆帯で形づくる。内部は中空で、眼・口のほか、鼻孔も貫通している。眼・口の周りは隆帯でやや高まりを見せている。

後頭部は、頂部に双環突起をもち、隆帯を垂下させる。右側に渦卷文と三叉文（玉抱き三叉文）、左側にm字状文が、それぞれ半肉彫りで表現される。頂部輪郭や隆帯にはキャタピラ文や綾杉文が施される。形態・眼の表現などから藤内Ⅱ式期の事例と考えられる。

定型的な顔面把手が出現する以前の藤内式期において、こうした半月形の輪郭に、隆帯で縁取った眼を付す例は、受地だいやま例（第6図1）はじめいくつか知られているが、本例は後頭部に双環突起をもつ点などから、顔面把手への移行する形態と位置づけられる。

### (3) 顔面装飾 2：170 号住居址（第2図2）

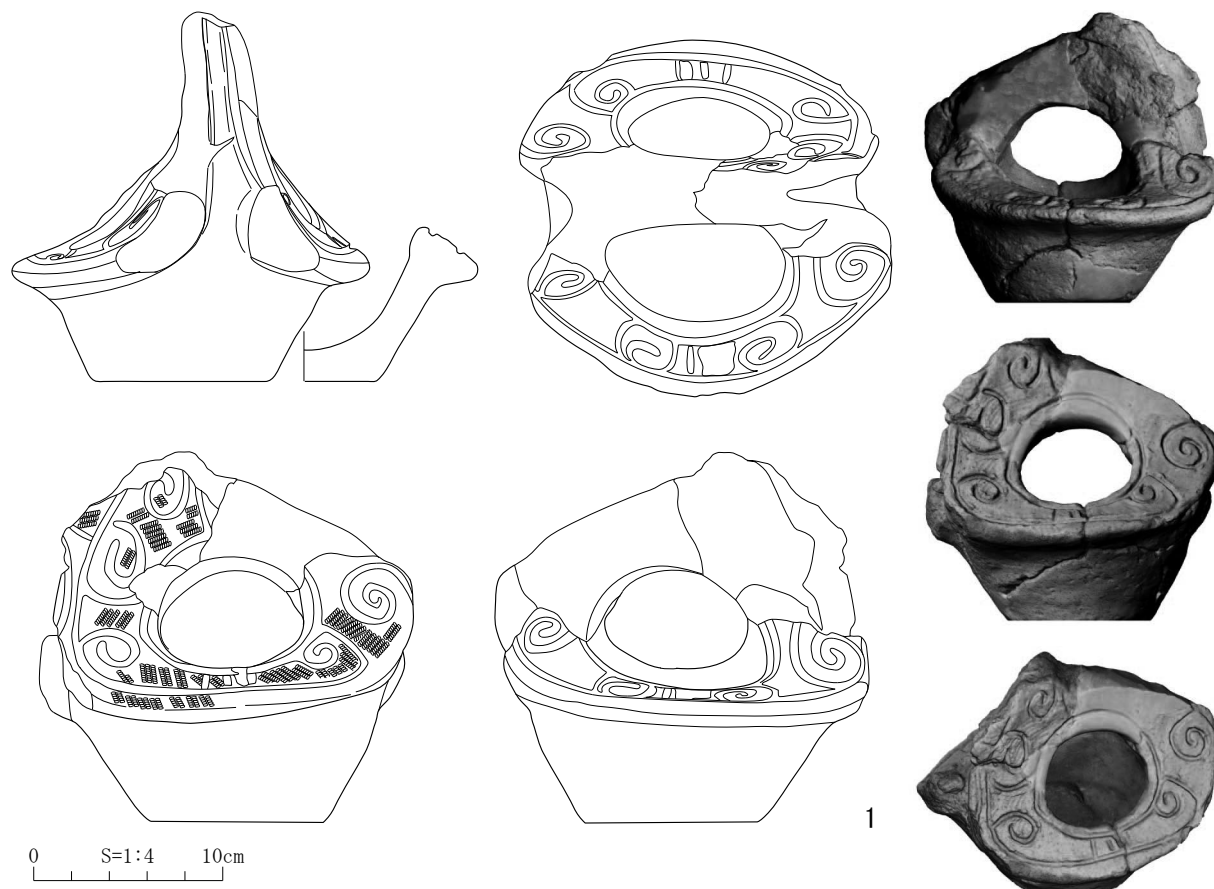
外湾する器体の外面に付された顔面装飾である。部位は口縁部であろう。輪郭はハート形で、眼・口は沈線で描かれる。鼻は表現されない。右顎の外側に、顔を囲うような隆帯があり、顔中央近くで垂下している。類例は府中市清水が丘例にみられる。

### (4) 顔面装飾 3：224 号住居址（第2図3）

前述のものと同様、口縁部外面に付された顔面装飾であるが、別個体である。器体に円形の粘土板が貼られ、その中にハート形の顔面が置かれている。内部は中空であり、眼・口は割り貫かれている。顎下から隆帯が垂下するが、隆帯内部はストロー状に中空となっている。

### (5) 釣手土器：101 号住居址（第3図1）

二窓式で、単位文（渦卷文、中央下部は三本の縦位沈線）を沈線区画で結ぶ構成をとる。側面観の傾斜が



第3図 阿久和宮腰遺跡出土資料（2）

緩い側を正面とするが、器面が荒れており、窓枠部分全体に施文されている縄文については、背面のみ確認できる範囲で図化した。両側面には上下2か所ずつブリッジが掛け渡されていた痕跡が残る。上下のブリッジの間の部分にあたる背面左側には、外側に向いた弧状の沈線と、その外側の端部が遺存している。欠損部分も多いが、渦巻文の方向は前後で内向き・外向きが逆、背面も左右対称になっている可能性が高い。渦巻文と刺突地文を特徴とし、神奈川県・東京都に多い「武蔵台東型」(中村 2013)に近い。(中村)

## 4. 青ヶ台貝塚

### (1) 遺跡の概要

青ヶ台貝塚は横浜市金沢区釜利谷字赤坂(現金沢区釜利谷東四丁目 41 付近)に所在する。本遺跡は宮川左岸の台地上、現在の平潟湾から 5km 程西の奥まった地点に立地するが、貝塚が形成された縄文時代には古平潟湾が台地東方まで侵入していたと考えられる(松島・川口 1991)。

本遺跡は団地造成に先立つ事前調査として、佐野大和が横浜市教育委員会より委託を受けて調査が行われた(佐野・西田 1994)。1967 年 11 月から 12 月にかけて第 1 次調査、1968 年 2 月から 3 月にかけて第 2 次調査が実施された結果、縄文時代中期の住居址 4 軒と敷石住居址と思われる敷石 1 基が検出されている。

本稿では、第 3 地点 J-15 グリッドから出土した顔面把手について報告する。この資料については江坂による資料紹介(江坂 1997)、調査概報(佐野・西田 1994)にて写真のみ掲載されており、今回図化して報告する。

### (2) 顔面把手：第 3 地点 J-15 グリッド(第 4 図)

顔面把手の上端から左上部にかけて欠損する。顔面は土器内面に張り出す口縁部上に接続しており、双環状の把手が縄文地文の土器外面に貼付している。残存する裏面の中央及び左上部には、隆帯による渦巻文や三叉文がみられ、一部の隆帯上には綾杉文が施される。

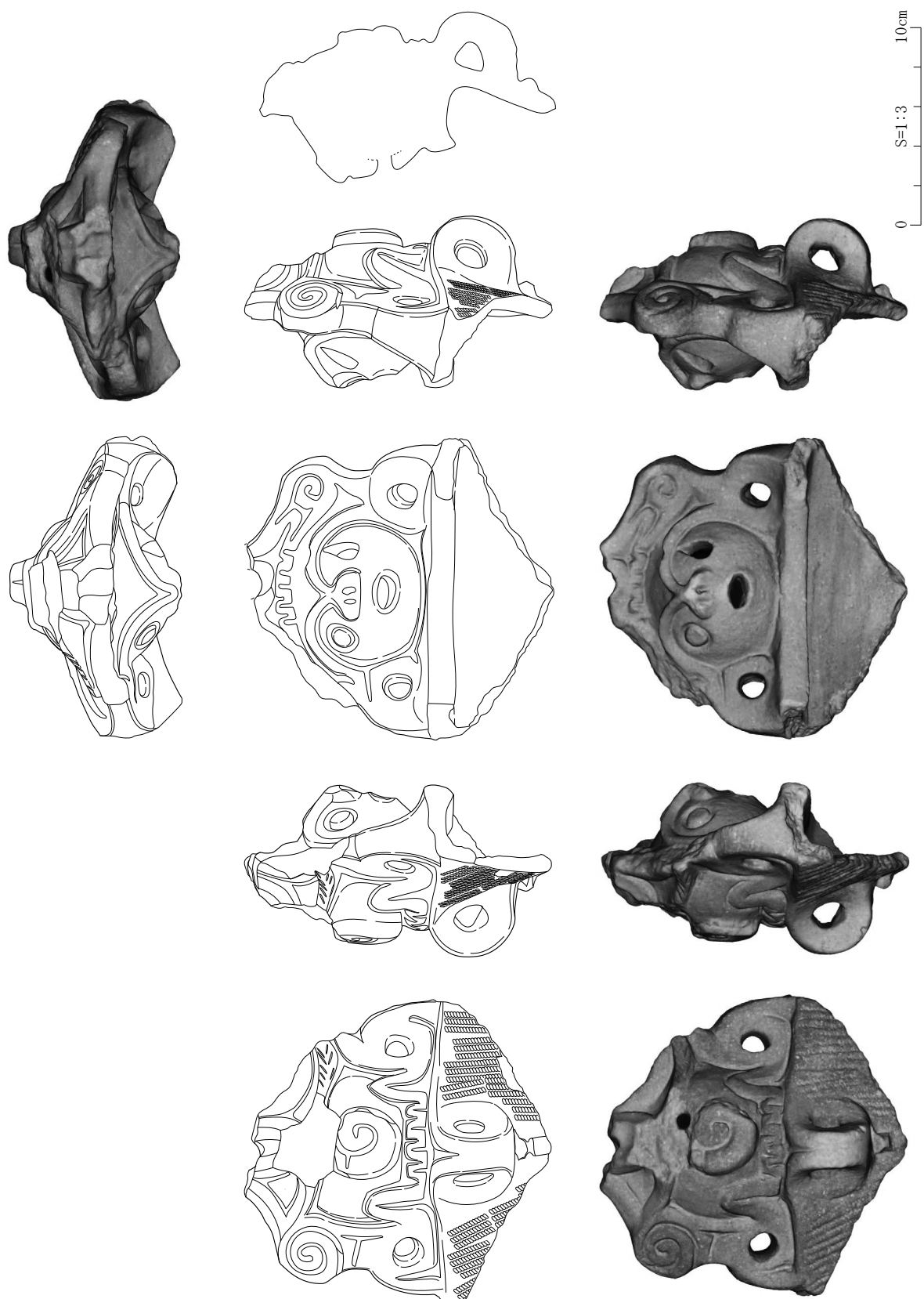
顔の表現は、円形の顔面に隆帯による m 字状の眉が付帯し、端部はそれぞれ耳と結合している。その上で眉と耳、耳と顔面下端の連結部は三叉状に削り出している。耳は土器の口径に沿うように内側へと緩く湾曲し、その中央は穿孔している。m 字状の眉中央、隆起する鼻の頂部はやや磨滅しているが、下端の鼻翼は左右に広がり、その中央には鼻孔と思われる縦位の刻みが 2 つ並列している。

顔面内部は中空であり、右眼は円形の穿孔部に上瞼中央から釣り上がるように切り込まれ、水滴のような形状を呈する。一方、左眼は竹管状の円形刺突が器面に施されるも貫通していない。左眼の円形刺突と右眼の円形穿孔部の直径が近似することから、同一の竹管状工具を使用した可能性も推察される。また、口は横長の楕円形になるように穿孔後に押し広げられており、孔部周縁の僅かに隆起した粘土が口唇のようにもみえる。(平山)

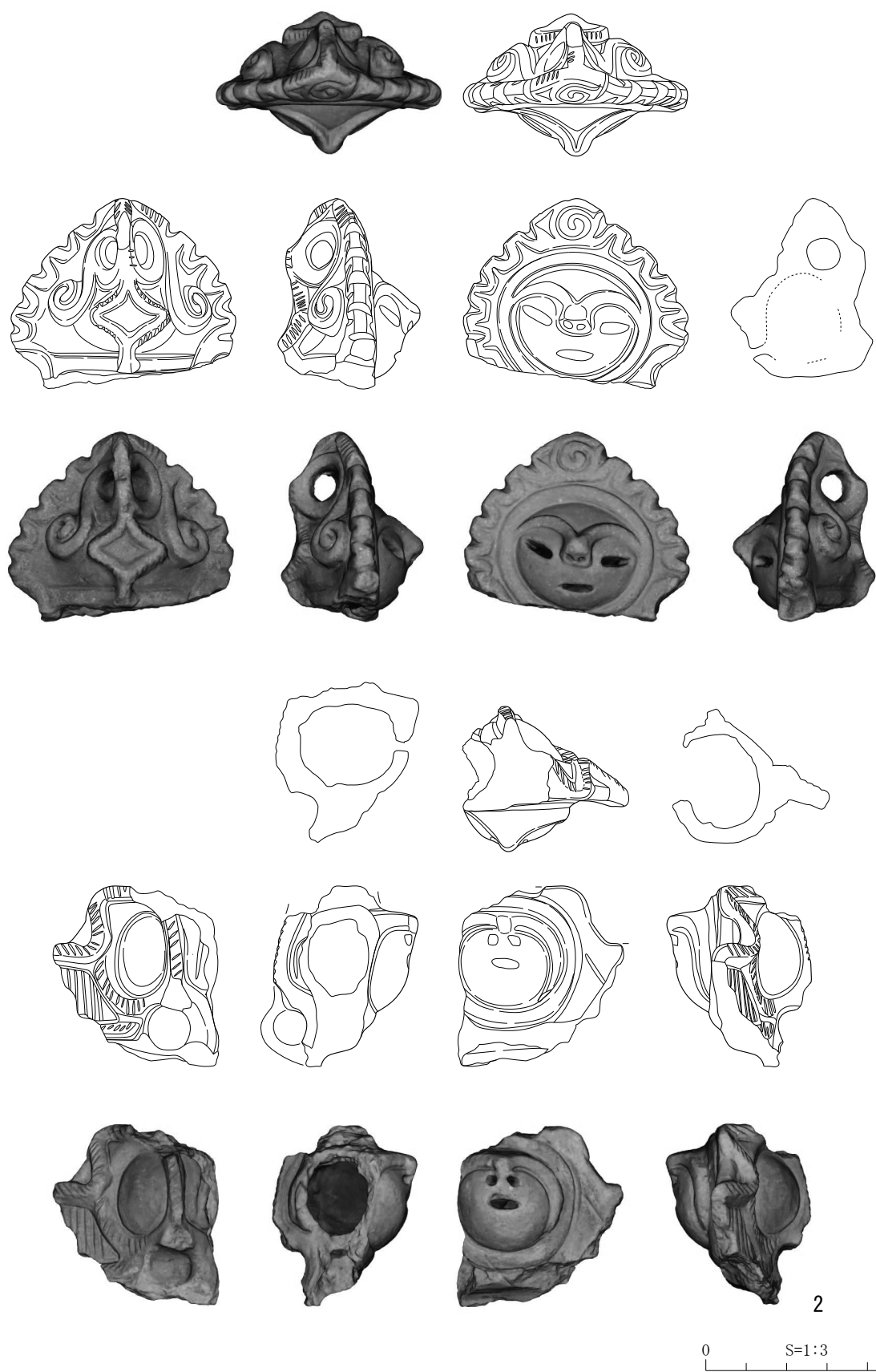
## 5. C16・17遺跡

### (1) 遺跡の概要

C16・17 遺跡は横浜市港北区大鵬町 353-1 他(現都筑区牛久保東一丁目 4 付近)に所在し、下末吉台地西端部に位置する。遺跡は鶴見川の支流である早瀬川左岸の段丘上に立地し、早瀬川が南東から東方へと流路を変える中流域に向かって南方に張り出す台地上にある。尚、本遺跡の南西には弥生時代の環濠集落で知



第4図 青ヶ台貝塚出土資料



第5図 C16・17 遺跡出土資料



られる大塚・歳勝土遺跡が隣接する。

C16・17 遺跡は、1977 年 2 月 10 日から 1978 年 3 月 10 日にかけて港北ニュータウン埋蔵文化財調査団により約 10,000m<sup>2</sup>の範囲で調査が行われ、縄文時代早期の炉穴 59 基・落とし穴 45 基、縄文時代前期の竪穴住居址 2 軒と縄文時代中期の竪穴住居址 46 軒、古墳時代の竪穴住居址 8 軒に歴史時代の土壌 2 基が検出されている。そのなかで縄文時代中期の住居址に関しては、弧状の台地平坦面に沿うように分布しており、中期中葉勝坂式期 21 軒と中期後葉加曽利 E 式期 25 軒で構成されている。

本稿では弧状に展開する C16・17 遺跡のうち、東側の C17 遺跡のトレンチ及びグリッド調査区から出土した顔面把手 2 点について報告する。これらの資料については調査概報等（横浜市港北ニュータウン埋蔵文化財調査団 1986、横浜市埋蔵文化財センター 1990）にて一部写真のみ掲載されている。今回改めて図化して報告する。

## (2) 顔面把手：C 17 遺跡 C トレンチ（第 5 図 1）

C16・17 遺跡に関しては調査報告書が刊行されておらず、出土状況等の詳細については今後に期するが、遺物の注記等から C17 遺跡の C トレンチ及びグリッド 45～50－30～35 区の遺物包含層から出土した資料として特定した。

C トレンチ出土資料の顔面把手は正面が土器の内側を向いており、双環状の把手が後頭部頂部に貼り付き、そこから隆帯による渦巻文と菱形文が垂下する。これら裏面の隆帯上には連続する刺突列が散見される。正面頂部には三叉の陰刻がある渦巻文がみられ、顔面の周囲には連続する三叉状のモチーフが放射状に巡る。

顔面は隆帯により円環状に縁取られ、その内側には隆帯による m 字状の眉が連結する。顔面部分は中空であり、眼・口の表現は近似した横長の穿孔部により構成されるが、正面左の眼尻がやや釣り上がる。m 字状の隆帯中央、隆起した鼻の下部には円形の刺突が 2 つ表現されている。

## (3) 顔面把手：C 17 遺跡 45～50－30～35 区（第 5 図 2）

45～50－30～35 区から出土した資料に関しては、把手正面上部から左側面にかけて欠損しており、遺存状態は良好でない。顔面は土器の内側を向いており、把手部分は残存部より裏面頸部に付帯していたと思われる。裏面の隆帯上にはやや幅広の刺突列が連続し、その区画内には平行する縦位沈線が充填する。

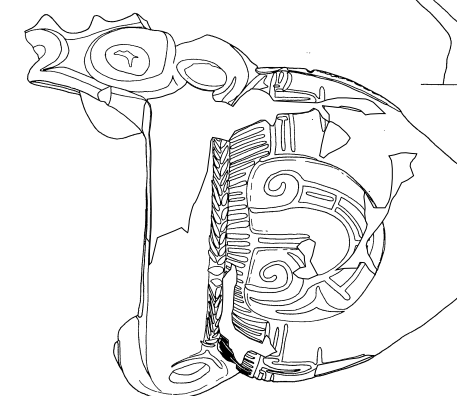
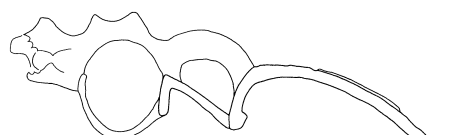
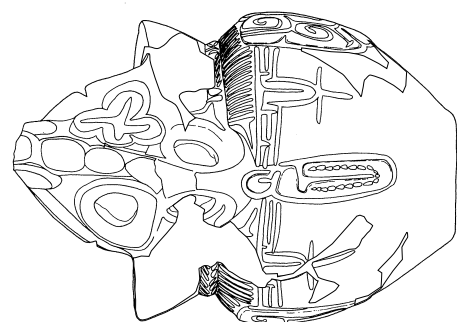
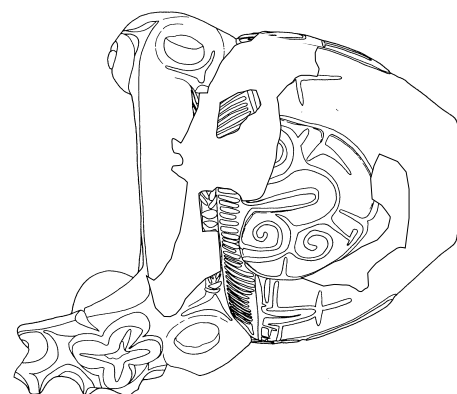
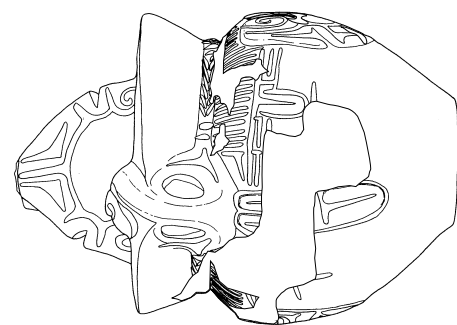
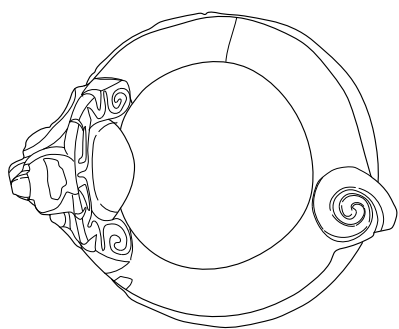
顔の表現は隆帯を円環状に巡らせた後、その内側の上部から隆帯による m 字状の眉が隙間なく接するように垂れ下がる。眉の中央、隆帯下から離れた付近には鼻孔と思われる円形の穿孔部が 2 つ並置し、さらにその下には横長の穿孔部により口を表現している。眉の隆帯下に沿うように沈線がみられるものの、両眼の表現は省略されたものと考えられる。

（平山）

# 6. 大熊仲町遺跡

## (1) 遺跡の概要

大熊仲町遺跡は、横浜市緑区大熊町 895・907 番地（現都筑区仲町台 3 丁目 16 付近）、鶴見川支流の大熊川左岸に位置する。1977 年 8 月 4 日～1979 年 9 月 16 日に港北ニュータウン埋蔵文化財調査団が、30,000m<sup>2</sup>を発掘し、早期集落および中期環状集落の半分ほどを調査した。中期（勝坂式～加曽利 E 式）では住居址 171 軒、掘立柱建物址 10 軒、土坑多数、集石などが検出されている（横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センター 2000）。



0 S=1:6 20cm

第6図 大熊仲町遺跡の顔面把手付深鉢

横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センター2000：第140図3に復元範囲を追記



1～3：受地だいやま遺跡（奈良地区遺跡調査団 1986） 4・5：高山遺跡（横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センター 2004） 6：上白根おもて遺跡（横浜市埋蔵文化財調査委員会 1984） 7：大熊仲町遺跡（横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センター 2000） 8・9：舞岡熊野堂遺跡（横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センター 2023） 10：折本観音山（町田 1955） 11：公田町（千葉 2012）

第7図 横浜市内出土の関連資料

## (2) 顔面把手付深鉢：J42号住居址

J42 号住居址からは、横浜市内で唯一の土器胴部を伴う顔面把手付深鉢が出土している。同住居址は 7 段階の重複が確認されており、最も新しい J42a 号住居址覆土中層～下層から 20 個体ほどの完形・半完形土器や大形破片がまとまって出土した中に含まれていた。但し、口縁部破片は J 4 号住居から出土したものが接合したものと報告されている。今回、頸部屈曲部より上の口縁部破片は J 4 の注記を確認できたが、顔面把手部分の注記は確認できていない。報告書に 4 面の実測図が掲載されているが、胴部文様の一部が欠損している部分が明示されずに復元されていることから、3D 計測を行い、実測図に復元部分を追記した。また、新たに上面図と、展開画像も作成した。

頭部正面は、顔面と想定される半球面の周囲に連続する三叉文を施し、その下端は渦巻文となる。通常の顔面把手の「耳」とされる貫通孔に相当する部分である。背面は、左右非対称で、左側は円文、右側は菱形（四叉）文で、いずれも中空の内部にむかって貫通している。頂部は欠損しているが、前側は遺存しており、背面側が高く伸びる形状であった。

胴部は部分的に欠損しているが、文様は規格性が高い。頸部に綾杉文を伴う隆帯がめぐり、縦位の沈線帯を経て、前後に楕円、左右に U 字の単位文が配される。それらの間は 3 条の横位沈線を U・T 字が縦に連なる文様で結ばれる。

なお、本例の最大の特徴である目鼻口を表現しないという点については、類例と共に吉本洋子・渡辺誠（2004）の検討がある。また、時期については、中山真治（2015）が新地平編年 9b 期に位置づけている。

## 7. 横浜市内出土の中期顔面装飾

十分な考察はできないが、市内出土の類例を図示しておく。このうち、公田町例（第 7 図 11）は大形のもので、土偶・顔面把手・釣手土器頂部の顔面装飾などの可能性がある。また、折本町観音山（第 7 図 10）は土偶の可能性もある。ほかに、中村日出男（1970）による地名表に、港北区宮の原貝塚（宮本常一採集）、戸塚区戸塚町踊場（古要祐慶所蔵）が掲載されているが、写真・図もなく時期も不詳である。

図化は、中村が Agisoft Metashape Professional 2.13、Cloud Compare を用いて、3D 化したものをデジタルトレースして行った。

## 引用文献

- 阿久和宮腰遺跡発掘調査団 2003 『横浜市瀬谷区 阿久和宮腰遺跡発掘調査報告書』阿久和宮腰遺跡発掘調査団
- 石野 瑛 1924 『武相の古代文化』早稲田泰文社
- 江坂輝彌 1970 「顔面把手新例紹介」『月刊考古学ジャーナル』第 44 号
- 港北ニュータウン埋蔵文化財調査団 1977 『港北のむかし』67
- 小林公明 1984 「月神話の発掘」『山麓考古』16
- 佐野大和・西田泰民 1994 『横浜市金沢区青ヶ台貝塚調査概報』
- 千葉 毅 2012 「神奈川県立歴史博物館所蔵の土偶・人面把手」『神奈川県立博物館研究報告－人文科



学－』第38号

中村耕作 2013 『縄文土器のカテゴリ認識と象徴操作』アム・プロモーション

中村耕作 2022 「顔身体土器群の展開過程と身体部位表現」『モノ・構造・社会の考古学－今福利恵博士追悼論文集－』

中村耕作 2024 「勝坂式土器の複雑化と西原大塚遺跡出土の顔面把手・蛇体把手付土器」『西原大塚遺跡第35地点』志木市の文化財第97集

中村日出男 1970 「顔面把手」『郵政考古』第1号

中山真治 2000 「顔面把手付土器小考」『東京考古』18

中山真治 2015 「顔面把手付土器小考2」『東京考古』35

奈良地区遺跡調査団 1986 『受地だいやま遺跡 上巻』

松島義章・川口徳治朗 1991 「横浜市南部、金沢八景瀬戸神社旧境内地内遺跡における自然貝層の14C年代とそれに関連する問題」『神奈川県立歴史博物館研究報告（自然科学）』20

町田公雄 1955 「折本観音山遺跡採集の土偶について」『アーケオロジー』第21号

横浜市港北ニュータウン埋蔵文化財調査団 1986 『古代のよこはま』

横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センター 2000 『大熊仲町遺跡』港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告26

横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センター 2004 『高山遺跡』港北ニュータウン地域内発掘調査報告35

横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センター 2023 『横浜市戸塚区舞岡熊之堂遺跡発掘調査報告書』

横浜市埋蔵文化財センター 1990 『港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告X 全遺跡調査概要』

横浜市埋蔵文化財調査委員会 1984 『上白根おもて遺跡』

吉本洋子・渡辺 誠 1994 「人面・土偶装飾付土器の基礎的研究」『日本考古学』第1号

吉本洋子・渡辺 誠 2004 「目鼻口を欠く人面装飾付深鉢形土器」『山梨考古学論集V』山梨県考古学協会

## 第7図出典

1～3：奈良地区遺跡調査団1986 4～6：横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センター2004 7：横浜市埋蔵文化財調査委員会1984 8・9：横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センター2023 10：町田1955 11：千葉2012